



なつのも



本校ホームページ
携帯・スマホ用サイト
でもご覧ください。

第145号 (R3. 10. 1)

練馬区立光が丘夏の雲小学校

行く先に 我が家 有りけり 蝸牛 (かたつむり)

校長 牧野光洋

この句は、幕末から明治にかけての剣客、山岡鉄舟が好んで書いていた句です。

山岡鉄舟は、明治維新に勝海舟と共に活躍した幕府側の武士でした。当時敵方の総大将、西郷隆盛をして「金もいらぬ、名誉もいらぬ、命もいらぬ、これほど手に負えない者はない。しかし、このような人物とでなければ天下国家を語るには及ばない。」と言わしめたのも山岡鉄舟でした。さらに、清水次郎長からも大変尊敬され、明治維新後は、明治天皇からも厚い信頼を置かれていました。最後は癌で亡くなられたそうで最後まで悠々としたものだったと記されています。一言も苦しいとは言わず、参禅の弟子でもあった名人落語家 三遊亭円朝に「集まっている人達が退屈だろうから」と言って落語をやらせ山岡鉄舟は座禅をしたまま息を引き取ったと言うことです。その山岡鉄舟が、よく富士山の絵と共に蝸牛を描き、この句を添えたそうです。蝸牛が遠く険しい富士山をゆっくりと登っていく。困難を乗り越えていく。私たちの今の人生を表しているかのようです。蝸牛はどこに行くにも自分の家を背負っています。いつも自分の家の中に居られるから、どこに行っても安心していられるというのです。



私たちは、生まれ育った家や故郷に帰ってくると何とも言えず心が落ち着きます。このことから落ち着くべき本来の自己に安住することを「本家郷の安心」と言われています。何の悩みもなければ、何の苦しみもない。これ以上、ことさら欲しいものもなく、捨て去りたい厭なものもない。無剰無欠（余ることなく欠くことはなし）の、満ち足りた心持ち、これが「本家郷の心安心」と言われるものだそうです。もちろん苦しみに出会わない、と言うものではありません。「どんな苦しみに出会っても、本家郷の心安心に安住していられる。」という心持ちをユーモアたっぷりに山岡鉄舟はこの句で表しているのです。

この苦しい世の中に何を呑気な……、と腹を立ててはいけません。地獄の修羅場を何度もくぐり抜けてきた山岡鉄舟の言葉です。一生受用不尽（一生使っても使い切れないほど）の深い味わいがあるはずですが、今日から緊急事態宣言も解除になりましたが、本家郷の心安心に安住していられることを深く読み解き、命を守ることを最優先にしながら、2学期の学校生活、今の生活を再構築して参ります。ぜひ皆様のご理解とご協力を賜り、子供たちが安心安全に生活できるよう願っております。

